

# 奈良県観光戦略本部 平城宮跡周辺エリア部会（第1回） 議事概要

日 時：令和6年9月9日（月）14:00～16:00

場 所：平城宮いざない館多目的室

出席者：部会委員長／内藤廣

部 会 委 員／青柳正規、磯部洋子、鶴殿裕、大木秀晃、杉山尚美、平賀達也、湯山壮一郎

## 1. 開会

## 2. 資料説明

## 3. 意見交換

### （1）「これまでの経緯」「平城宮跡周辺エリア部会」「平城宮跡周辺エリアの現状」について

- ・平城宮跡を訪れる人が少ないことより、リピーターがいないことの方が課題である。
- ・はじまりの奈良、食のはじまりも奈良。食の集積地とか、日本を発信する場となると面白い。
- ・ガストロノミーツーリズムは、食、歴史、文化、立地、宗教などの全てを、ストーリー立てて体感・体験する考え方。平城宮跡周辺エリアが、食を切り口に歴史文化を体感・体験でき、日本に来たら絶対来る場となりうる素地が奈良にはある。
- ・奈良県の事業者は、奈良に根付いて、奈良の歴史文化を語れる方が多い。平城宮跡周辺エリアで、このような事業者をうまく活用できるとよい。
- ・インバウンドはトレイルで楽しみたいという方が多い。平城宮跡周辺エリアは、全て歴史文化の集積地だと思うので、トレイルで歩いて頂き楽しんで頂ける場になればよい。
- ・近鉄の車窓から望む、住宅街から急に草むら、平城宮跡に入る風景は大変綺麗だが、同乗者は平城宮跡であることに気付いていないことが印象的だった。車窓から望む風景が、わくわく感のある立派なエントランスだが、アナウンス等がなく非常にもったいない。
- ・歴史があるということは、ロマンがあるということ。平城宮跡周辺エリアは、非常に敷地が広いので、AR、VRなど、歩きながらロマンを伝えることができる手法もある。
- ・奈良は日帰りしたくなる。泊まったときに遊ぶ場所がない。24時間の間で、奈良でどういったおもてなしをするのかを考える必要がある。
- ・常連、1回しか来ない人、リピーターが1:1:1の割合になると、コミュニティが非常に活性化するという法則がある。この視点から平城宮跡周辺エリアのあり方を考えるといい。
- ・人を集めるには、居心地が良く、交流・つながりが生まれる場所（サードプレイス）を創るのが大事。コンセプトが明確でないと、そこに来ると理由が生まれない。そこを考えることが重要。
- ・ハードと、コンセプト（そこに来ると理由）が表裏一体で組み合わさることが重要。
- ・平城宮跡周辺エリアの立地はすごくいい。日本最強のコンセプトを持っている土地なので、それをどういった言い方や使い方をしていくのかということがポイントになってくる。
- ・催事やイベントで一時的に熱を上げるタイミングと、サードプレイスを常時保ち続けることの両方の設計が必要となる。
- ・平城宮跡周辺エリアは、ポテンシャルはあるがサードプレイスがない。現状の条件ではなかなか難しい。
- ・平城宮跡周辺エリアは、日本の看板として魅せていくべき場所、オールジャパンにとって非常に大事な場所。

- ・イベントだけでは、継続的に人を惹きつけるものにはならない。そこにしかない人の営み、汗や息遣いがある場所に、人は惹きつけられる。平城宮跡周辺エリアに、どういう方がコミットし、継続的に活動頂くのが重要。
- ・ストーリーがないといけない。例えば、平城宮は、1300年という悠久の歴史ということに加え、西方でソグド人やペルシャ人、東アジアの人々がいるシルクロードの終着点であることなどを上手く現代的にとらえることが重要。そうしたストーリーの上に、活動や施設が乗っかっていないといけない。
- ・地域経済は、生産、分配、支出と所得が循環することで成り立っている。奈良県の地域経済は、雇用者所得等で所得が流入する一方で、貿易赤字が大きい。県内で買うものの多くが県内産でないので、地域にお金が残らないという状況。
- ・平城宮跡に設けられる訴求力・吸引力があるものが、県外から持ち込まれたものであれば、結局、奈良の地域経済循環、観光 GDP の増大には繋がらない。
- ・SDGs のウェディングケーキモデルに照らし合わせ、環境・社会・経済の3側面での土地を見たときに、千年以上の歴史に紐づく環境基盤と、昨今のインバウンド需要も踏まえた経済的なポテンシャルは存在する。一方で社会性という観点も抜けており、行政パートナーとしての施設運営者を選定する上でも、この場所でのどのような社会連携を目指すべきか議論が必要である。
- ・立体都市公園制度を活用し、1Fを駐車場、上部を公園とする計画も考えられる。建物が低く見晴らしの良い都市構造は奈良の資産であり、地域を眺めながら街の未来を語れる場所に、エリアマネジメント拠点など社会性のある施設を配置することは効果的である。
- ・平城京は、歴史があることは誰もが認める場所であるが、それをイメージ化しにくいところ。平安京に移るたかだか70～80年の短い期間。源氏物語や枕草子など、平城京を記述しているものが多くない。
- ・100年程度で律令制度に基づき、とんでもないスピードで近代化を成し遂げていることが一番の魅力ではあるが、それをいかに明示化するかということに知恵を絞らないといけない。
- ・コンテンツの明示化が前提となるが、伊勢神宮とおかげ横丁、浅草寺境内と仲見世のように、聖と俗、コンテンツとそれに付随するものを対比させる考え方もある。俗が、観光地としての集客率を上げる。
- ・一言でいうと、平城宮跡はすごいと思うけど来ないよねという印象。インバウンドの観点からいうと、平城京はソグド人との関わりも強かったのも、アジアを強調してもよいとも思う。
- ・人が行きたいと思う要になるものを先に考えて、その次に必要があれば整備するという考え方をすべき。順番を逆にしない方がよい。
- ・すごい人が集まるハチ公前広場と、そうでもない代々木公園の関係性のように、平城宮跡周辺に無理に人を集めず、奈良公園周辺と相互に成り立たせるという考え方もある。

## (2)「県営公園区域（検討対象区域）に求められる要素・方向性（案）」について

- ・付加価値が高いサービスを提供する場合は、高い料金を頂くというスタンスも意識する必要がある。公共が関与すると、廉価性を求める傾向が強まることが多いが、国の観光戦略の核心は高付加価値化をして、それに見合った対価を得て、地域経済を発展させることであり、より高い付加価値を提供してしっかり料金をもらうということを頑張って追及すべき
- ・平城宮跡歴史公園全体の議論として、国営公園区域ともよく連動して頂きたい。
- ・平城宮の歴史的価値をコンテンツ化・イメージ化するのが難しいとのことにご意見に同意。その上で、無理に古いものそのものを復元・レプリカするだけではなく、平城宮の時代が持っていた精神性、ソフト面を現代的に現出させるというアプローチもあるのではないか。例えば、平城京

の時代では、律令制とか新しい都市国家の建築、仏教美術など、新しいことへのチャレンジする場所であった、何かを創造する場所であったという平城宮の時代の核心を引き継ぐ場所としてはどうか。

- 平城京は、律令国家を約 100 年間の短期間で創りあげた。つまり、新しいことをクリエイトしていく場であったという特性があると考えている。この特性を現代版に解釈してブランド化して打ち出していく考えもあっていい。
- 奈良には意外に面白い企業がある。平城宮跡周辺エリアに、そんな企業と連携していくと 8 世紀の現代版を創りあげることできると思う。
- 検討対象区域のうち平城宮跡南側地区は、平城宮跡の本体から一番離れている。この位置づけを踏まえ、かなり現代的なバージョンとして奈良の魅力を生み出すところになると面白い。そこから将来のマスタープランに当てはめてもよい。

### (3)「今後の進め方(案)」について

- 有形、無形の両方の価値が大切。当時の平城京で行われたイノベーション、最先端なことをやり遂げる精神が無形な価値だとすれば、その相似形は無形だからこそ現代版ができる。何を大切にするのかを議論したうえで、事業者やパートナーを選んでいくべき。
- 事務局からは、公園における建蔽率など、ベースとなる条件を示してほしい。その上で理念、ビジョンを議論できればよい。
- ト書きで地元の方がここで何をして過ごしたいことを把握する、どうすれば平城宮跡へ人が来るのかを検討するためにトライアルサウンディングするなどの手法もある。
- せっかく本部会には様々な分野の専門家が集っているのだから、ワーキングメンバーとして本部会がアイデアを出すことをミッションとしていきたい。
- 2 回目の部会は、各委員でアイデアを持ち寄り、その意見を全員で確認したうえで意見交換するような進め方をしたい。

## 4. 閉会

以上